時間副詞に関する一考察
—「とつぜん」と「ふいに」を中心に—

江　　雯　　薫

1．はじめに

現代日本語において、「とつぜん（に）」と「ふいに」という時間副詞には、次の(1)のように、どちらも言える場合がある。

(1) 飛行機は｛とつぜん（に）／ふいに｝爆発した。

(1)では、「飛行機の爆発が瞬時に起こった」ことが表されている。すなわち、「とつぜん（に）」と「ふいに」はどちらも、「事態の実現が瞬時であるさま」を表す点で共通していると言える。この「事態の実現が瞬時であるさま」を、本稿では、「突発性」と呼ぶ。

ところで、「とつぜん（に）」と「ふいに」は、次の(2)のように、置き換えられない場合もある。

(2) 「突然｛＊ふいに｝お伺いして申し訳ありません。」（花埋み）

(2)では、「とつぜん」を「ふいに」に換えると、非文になる。このことから、両語の間には相違点があることも確認できる。しかし、これについては、後述するように、先行研究ではあまり明らかにされていない。このようにみると、両語の使い分けを明確にする必要があると言える。

なお、「とつぜん（に）」は、今回集めた用例では、「とつぜん」が480例、「とつぜんに」が66例で、「とつぜん」の方が使用頻度が高い[1]。本稿では、使用頻度の高い「とつぜん」を対象にして、「ふいに」との異同を考察することにする。

2．先行研究とその問題点

先行研究でも、「とつぜん」と「ふいに」が類義語であることは注目されてきた。

まず、時間副詞について体系的に記述している仁田（2002）では、両語は、「起動への時

---

1 「とつぜん」と「とつぜんに」は、(ア)のように置き換えられる場合もあれば、(イ)のように置き換えられない場合もある。このように、「に」の有無によって生じる異同を究明する必要もあると思われるが、それについては、今後の課題とする。

(ア) ｛とつぜん／とつぜんに｝雨が降りだした。

(イ) 鮎太は、突然｛突然に｝女の声を耳にして立ち止まった。（あすなろ）

間量」[2]を表す時間副詞で、「僅少所要型」に属するもの（「事態の取り掛かり・起動までに要する時間量がきわめてわずかであることを表すもの」）とされている。これは、本稿で言う「突発性」と同じものである。仁田（2002）では、両語の相違点に関する指摘はなされていない。そのような観点からの研究には、國廣（1982）、森田（1989）、飛田・浅田（1994）がある。

國廣（1982）は、両語の共通点については「それらの現象、行為の生じ方への〈驚き〉が含まれている。自分の意志で行う行為には〈驚き〉がないのが普通であるから、自分の行為には用いられない」ことと、「自分の意志で制御できない感情の動き、感覚などには使うことができる」ことを挙げている。一方、両語の相違点については、「とつぜん」は「出来事、人間の意図的行為、自然現象などに使え」、「ある事態の生じ方が瞬間的であり、その事態と前の事態との断絶が際立っている」が、「ふいに」は、「具体的な行為、具体的な場面での体験を表わすのに用いられ、感覚に直接訴えないような行為、現象には用いられない」、「〈その現象・行為の影響を受ける人間〉の側の視点に立って、それらに対しての〈驚き〉を表わしている」ことを指摘している。

だが、両語の共通点についての、「それらの現象、行為の生じ方への〈驚き〉が含まれている。自分の意志で行う行為には〈驚き〉がないのが普通であるから、自分の行為には用いられない」という記述は、次のような例を説明できない。

(3) 「突然|＊ふいに|お邪魔して申し訳ありませんが」全裸に近い姿の男の前につっ立っている無法に吟子は初めて気付いた。（花埋み）

(3)は、話し手が自分の突発的な行為を聞き手に謝罪する例である。話し手には、その行為によって＜驚き＞は生じていないが、聞き手に＜驚き＞を与えたと話し手が予測して言うのである。しかし、聞き手に＜驚き＞が生じているかは実際には不明である。この場合の「とつぜん」と「ふいに」は、國廣（1982）の記述ではどちらも使えると思われるが、「ふいに」を用いると非文となる。このことから、國廣（1982）の記述では収まらないところがあると言える。

森田（1989）は、「いきなり」の項目で関連語として「とつぜん」「ふいに」を取上げている。「とつぜん」については、「行為・作用・現象などが前触れなしに急に起こるさまに用いる」こと、「自然現象、無意識行為、意識的な行為、いずれも可能で、ある瞬間に成立する動作・作用・現象に使う」ことを述べている。一方、「ふいに」については、「純然たる自然現象や

2 「起動への時間量」について、仁田（2002）は「事態が生じるまでの時間量、事態への取り掛かりまでの所要時間に関わるものである」と説明している。「すぐ」「たちまち」等は、その代表として用いられる副詞である。

無意志性の行為「十一時五十八分、不意に大きな地震が襲ってきた」「不意の事故」などの例も見られ、使用の幅はかなり広い。ただし、いずれも、その不意の行為・現象によって受け手が驚きあわてたり、迷惑を被ったりするマイナスの場合である。プラスの事柄「不意に痛みが取れた」とか、「不意に受賞が決まった」などとは言わない」こと、「マイナスの事柄に「思いがけない」「思いもよらない」「意外だ」の気持ちが加わり、さらにマイナスの結果が添うという限定された状態のとき「不意に」が用いられる」ことを述べている。

しかし、次の(4)のような例は、森田（1989）の「マイナスの事柄に「思いがけない」「思いもよらない」「意外だ」の気持ちが加わり、さらにマイナスの結果が添うという限定された状態のとき「不意に」が用いられる」という「ふいに」についての記述では、説明できない。

(4) 足元のれんげ田には、ところどころ土がのぞいている。「昔、れんげ畑のでてくる絵本を読んだわ」ふいに思いだし、それをそのまま口にする。（ホリー）

(4)の「思いだし」は、その思いだした内容「昔、れんげ畑のでてくる絵本を読んだわ」から、プラスでもマイナスでもないイメージを表していると言える。

また、飛田・浅田（1994）は、「とつぜん」については、「予想しない事態が何の前ぶれもなく起こる様子を表す。プラスマイナスのイメージはない」こと、「何の前ぶれもなしに急激な変化が起きることを誇張的に表し、話者の驚きの暗示を伴う」ことを述べているが、「ふいに」については、「予想しない事態の変化が突然起こる様子を表す。ややマイナスイメージの語。」と説明している。

飛田・浅田（1994）の「予想しない事態が何の前ぶれもなく起こる様子を表す」という「とつぜん」の記述では、次の(5)のような例を説明できない。

(5) 連絡があるとは聞いていたが、その連絡が｛とつぜん／＊ふいに｝きて驚いた。

(5)では、連絡がくることは、話し手にとっては予想されていたことである。この場合に「とつぜん」が使用できることは、飛田・浅田（1994）の記述に反すると思われる。

このように、先行研究に収まらないものをどのように解釈するか、考える必要があると思われる。以下、これらの問題点について明らかにするために、構文的また意味的に両語について考察する。

3．構文的に見た「とつぜん」と「ふいに」について

3．1　文末の述語について

3．1．1　述語に現れた特徴

「とつぜん」と「ふいに」の文末の述語には、(6)～(8)の「いる、似る、精通する」のように、動作・変化を伴わず、形容詞的性格を持つ静態動詞は来ないが、(9a)（9b）の「立ち止

まる、なる」のように、動作・変化を伴う運動動詞はくる。

(6)＊彼は｛とつぜん／ふいに｝撮影現場にいた。

(7)＊彼らは性格が｛とつぜん／ふいに｝似ている。

(8)＊彼は｛とつぜん／ふいに｝パソコンに精通している。

(9)a．遠くにいるため、やはりその人物の意識は感応できなかった。誰だろう、と思いながら七瀬はまた歩きはじめた。突然、七瀬はふたたび立ちどまった。（恋人）

b．（なぜ、この人は口を開かないのだろう）その人は黙って立っている。ふいに、わたしはその人がきらいになった。（石）

このように、文末の述語には「運動性」が要求されると言える。だが、同じ運動動詞でも、(10)(11)のように内的情態動詞の場合は、両語と共起しえない。

(10)＊彼女は｛とつぜん／ふいに｝進学のことを悩んだ。

(11)＊彼女は｛とつぜん／ふいに｝ペットの死を悲しんだ。

これは、人の内的な気持ちと感情には、運動性が乏しいからである。また、内的情態動詞によって表される出来事は、空間内で起こる外的な出来事より限界性が明瞭でない。この「限界性」も、両語との共起において、重要な要素の一つである。次の(12)～(14)を見られたい。

(12)＊息子は｛とつぜん／ふいに｝大阪に住んでいる。

(13)＊彼は｛とつぜん／ふいに｝太っている。[3]

(14)＊その宗教は信者が｛とつぜん／ふいに｝増えている。

(12)の「住んでいる」は「息子の大阪での生活が（長期間）続いている状態」を、(13)の「太っている」は「太った体型を（長期間）維持している状態」を、(14)の「増えている」は「信者数の増加が（長期間）続いている状態」を表す。(12)の「住む」は運動性が乏しく、存在や状態に近い意味を持っている動詞であり、(13)の「太る」と(14)の「増える」は動作・変化が徐々に進行していく「漸次性」を持つ動詞である。これらは、限界性がないことで共通している。

以上から、文末の述語には「運動性」と「限界性」が必要であることが明確になった。ただし、「限界性」は、終了限界でなく、開始限界をさしている。次の(15)～(17)を見られたい。

(15) 彼は｛とつぜん／ふいに｝走った。

(16) 彼女は｛とつぜん／ふいに｝服を脱いだ。

(17) 窓ガラスが｛とつぜん／ふいに｝割れた。

(15)の「走った」は「走り出した」を、(16)の「脱いだ」は「脱ぎおわった」でなく、「脱ぎは

3 (13)の「彼は高校の時に｛とつぜん／＊ふいに｝太っている。」と(14)の「その宗教は3年前に信者が｛とつぜん／＊ふいに｝増えている。」のように、時期を限定すると、「とつぜん」は言える。この場合の「している」は、「結果継続」ではなく、パーフェクト相である。

じめた」を、(17)の「割れた」は「割れた」その一時点を意味している。(15)の「走る」は、限界性を持たない動詞であるが、(16)の「脱ぐ」と(17)の「割れる」は、限界性を持つ動詞である。また、限界性を持つ動詞のうち、(16)の「脱ぐ」のような動詞は、開始限界と終了限界の両方を持つ動詞であるが、(17)の「割れる」のような動詞は、開始限界と終了限界が同一である動詞である。これらは、「とつぜん」「ふいに」と共起すると、いずれも開始限界をさす。また、次の(18)の「悩む」のように「逐動性」が乏しい動詞や、(19)の「走る」のように「逐動性」はあっても「限界性」を持たない動詞の場合は、「～はじめる」「～だす」と共起することによって、許容度が高くなる。

(18) a．＊彼女は｛とつぜん／ふいに｝就職のことを悩んだ。

b．　彼女は｛とつぜん／ふいに｝就職のことを｛悩みはじめた／悩みだした｝。

(19) a．歩いていた馬が｛とつぜん／ふいに｝走った。

b．歩いていた馬が｛とつぜん／ふいに｝｛走りはじめた／走りだした｝。

(18)の述部「悩む」は、人間の内面的な感情であり、外部からの観察で捉えにくいものである。しかし、「～はじめる」「～だす」というアスペクト形式にすると、観察者によって、開始限界が判断される。(19)の「走る」は、限界性を持たない動詞で、(19a) では「走りはじめる」局面が示されている。「走る」は、「～はじめる」「～だす」というアスペクト形式にすると、限界性が具体的に生じたように感じられ、より自然な例となる。

3．1．2　アスペクトからみた特徴

アスペクトからみると、文末の述語は、完成相 (20)、パーフェクト相 (21)、反復相 (22)、起動相 (23) で表すことができる。

(20)　大雨が｛とつぜん／ふいに｝やんだ。

(21)　八月中旬には瑞鶴はふたたびソロモン海域へ向った。そのしばらく前、米軍はふいに｛とつぜん｝ガダルカナル島に上陸していた。(楡家)

(22)　彼はいつも｛とつぜん／ふいに｝電話をかけてくる。

(23) a．それから突然、あまり関連もなく彼は船成金の悪口を言いはじめた。(楡家)

b．そのとき、ふいに横手の上空に爆音がひびきだした。(楡家)

(20)は「とつぜん」「ふいに」によって、「大雨がやんだ」ことが「突発的」であったことが示されている。このような完成相で表す場合は、その動詞の語形は「する」形でなく、「した」形である[4]。(21)は、「米軍はガダルカナル島に上陸した」ことを完成的に捉えて、そのあとの効力が続いていることを示す例である。(22)では、「彼は電話をかけてくる」ことを完成的

4　「する」形でも、「＊雷が｛とつぜん／ふいに｝とどろく。」のような一回的な出来事を表す場合ではなく、「雷は｛とつぜん／ふいに｝とどろく。」のような性質・属性を述べる場合は、非文とならない。

に捉えて、「いつも」との共起で、その繰り返しを示す[5]。また、(23a) の「言い始めた」と (23b) の「ひびきだした」は、「～はじめる」と「～だす」といった起動相と共起して、出来事を完成的に捉えるものである。

また、文末の述語は、継続相 (24)(25) で表すことはできない。終了相 (26) でも表しにくい。

(24)＊彼は {とつぜん／ふいに} 走っている。

(25)＊彼は {とつぜん／ふいに} 心臓麻痺で息絶えている。

(26)＊立ち読みをしていた漫画を、{とつぜん／ふいに} 読みおわった。

(24)の「走っている」は「動作継続」を、(25)の「息絶えている」は「結果継続」[6]を表すものである。(24)(25)のような意味を持つ「している」形と共起できないことから、「とつぜん」「ふいに」は継続相と相容れないと言える。また、(26)の「読みおわった」は出来事を完成的に捉えて、終了限界をさすものである。この場合は、非文となるが、次の(27)のような場合は、非文とならない。

(27) 母親の顔を見た赤ん坊は、{とつぜん／ふいに} 泣き止んだ。

(27)の「泣き止んだ」は「泣く」という動作を完成的に捉えて、終了限界をさすものである。(26)(27)の違いは、(26)の「～おわる」は、何か目標をもってやる仕事の場合以外は、使うと不自然になるものであるのに対して、(27)の「～やむ」は自然現象、あるいは人の動きでも無意識的な、あるいは衝動的なものに用いられるものであることである。そして、何か目標をもってやる仕事の場合に用いられる「～おわる」は、「とつぜん」と「ふいに」の「突発性」とは相容れないので、両語と共起することはできないと考えられる。

このようにみると、両語を用いる文では、出来事を完成的に捉えること、また完成的に捉えるときは、終了限界より開始限界を示す場合が多いこと[7]が重要である、と言える。

3．1．1と3．1．2から、「とつぜん」「ふいに」を用いる文は完了した事態であると言える。また、継続的に捉えられないことと、終了限界をさしにくいことは、両語のもっている「突発性」と関わっていると言える。

---

5 「＊彼はいつも {とつぜん／ふいに} 電話をかけてきている。」のように、「電話をかけてくる」ことが継続的に捉えられて繰り返されるなら、非文となる。それは、事態を継続的に捉えると、限界性がなくなるからである。

6 「結果継続」について、工藤 (1995) は、「結果継続＝状態パーフェクトは、「運動の完成後の段階＝結果状態の継続性」に重点がある。」としている。

7 今回収集した用例には、アスペクト形式と共起する例が、「とつぜん」に18例、「ふいに」に32例あった。それらは全て、「始発」の局面を表すアスペクト形式と共起する例である。このことから、「とつぜん」と「ふいに」は「始発」の局面を表すアスペクト形式と共起しやすいと言える。

3．2 「とつぜん」と「ふいに」の係り先について

「とつぜん」と「ふいに」の係り先について、述語が二つ以上ある場合から考察する。

(28) a．突然声をかけられて鮎太は立ち止まった。(あすなろ)

b．エディは、不意にジムの大鏡の前に歩み寄り、その傍に置いてある古いラジオのチューナーを回しはじめた。(一瞬)

(29) a．――志乃は半月ほど前の夕食のとき、ピーマンを食して突然嘔吐におそわれた。(忍ぶ川)

b．心をこめてという言葉をそのまま表わすような、徐々に深く首をうなだれていく助川の後姿を見て、久子はふいに胸をつかれた。(影)

「とつぜん」「ふいに」は、(28a) では「かけられて」まで、(28b) では「歩み寄り」まで係る。また、(29a) (29b) では、文末の述語に係っている。以上から、「とつぜん」と「ふいに」は、共にその直後にくる動詞に係るのが普通である、ということが言える。ただし、次の(30)のように、直後だけではなく、文末にまで係ると考えられる例もある。

(30) {とつぜん／ふいに} ふるさとの風景が映し出されて、子供の頃のことが思い出された。

(30)の「ふるさとの風景が映し出される」と「子供の頃のことが思い出される」は、同時または同時的に起こった出来事であると思われる。このように、一連の動作・変化が同時または同時的に起こると考えられる場合は、文末まで係ることも可能である。

以上より、両語ともその直後にくる動詞に係ることが多く、文末の動詞まで係る場合でも、二つの出来事が同時または同時的に起こった一連の動作・変化であると言える。これは、二つの出来事が継起的に起こった場合、それを瞬時に起こったものとは考えにくいことによる。つまり、両語の特徴である「突発性」と関わっていると考えられる。

3．3 意志性の有無からみた「とつぜん」と「ふいに」について

意志性の有無からみると、「ふいに」と「とつぜん」は、共に一人称で無意志的な動作を表すことができるが、意志的な動作を表すことはできない。

(31) 私は {○とつぜん／○ふいに} 思いだした。

(32) 私は {＊とつぜん／＊ふいに} 走りだした。

両語は、(31)の「思いだした」のような無意志的な動作を表すものと共起すると、非文とはならないが、(32)の「走りだした」のような意志的な動作を表すものと共起すると、非文となる。また、(32)の「私」を「彼女」に換えて、「彼女は {とつぜん／ふいに} 走りだした」とすると、許容される。このことから、意志的な動作を表す場合、両語には共に人称の制約があると言える[8]。

8 両語を用いる実例には一人称で意志的な動作を表すものはないが、前掲の (2) の「突然お伺いして申し訳ありません。(花埋み)」のように、「とつぜん」には、謝罪の文章の従属節では一人

また、一人称でない場合は、「ふいに」文には、次の(33)の「思いだした」のように、意志性を持たない動詞がきやすく[9]、意志的な動作を表す例は少ない。

(33) 彼は筑後守の作り笑いや老人らしく手をこすりあわす動作をその時不意に{とつぜん}思いだした。(沈黙)

(33)の「彼」は、「思いだした」という意志性のない動作の主体である。この場合、「思いだした」は、主体にとって何の予想もしていなかった場面で生じたことであり、意志的な動作の結果で生じた事態ではない。

このように、一人称で意志的な動作を表せないことは、自分の意志的な行為に突発的に感じ取ることはできないからであると言える。つまり、両語の特徴である「突発性」と関係していると考えられる。

4. 意味的に見た「とつぜん」と「ふいに」について

「とつぜん」と「ふいに」の置き換えから次のようなことが見られる。

A. 両語は共に「事態の実現が瞬時であるさま」を表す点で共通しているが、「ふいに」は、「予想もしていなかった事態が一瞬のうちに起こる」のに対し、「とつぜん」は「「予想」と「前触れ」の有無と関係なく、一瞬のうちに何かが起こる」という点で異なっている。

(34) 長年音信不通だった友達が{とつぜん／ふいに}訪ねてきて驚いた。

(35) アメリカに住んでいる友達に「そのうち遊びに行くからよろしく」と言われてはいたが、{とつぜん／＊ふいに}訪ねてきて驚いた。

(34)は、長い間連絡もない友達が、突発的に訪ねてきたことに驚いた、という意味を表す。つまり、予想もしていなかったことが起こってしまったのである。一方、(35)は、「そのうち遊びに行くからよろしく」とアメリカに住んでいる友達に言われていたので、いつか訪ねてくると予想していた、という例である。この二例をみると、予想していても、していなくても、「とつぜん」は使えるが、「ふいに」が使えるのは予想のない(35)のみだと思われる。このことから、「ふいに」は予想していた事態に用いられないと言える。また、

(36) 晴れているのに、{とつぜん／ふいに}雨が降り出した。

(37) 空が曇ってきて、{とつぜん／＊ふいに}稲光が走った。

(36)では、「雨が降り出した」ことは、晴れている空からは起こりにくいことであり、前触れなしに起こった出来事である。(37)では、空が曇ってきたことから、稲光が起こる前兆がある

称で意志的な動作をとる場合がある。

9 「ふいに」の実例（230例）の中で、意志性を持つものは77例（全体の33.48％）で、持たないものは153例（全体の66.52％）である。

と判断できる。この二例共で「とつぜん」が使えるところをみると、前触れの有無は「とつぜん」には重要ではないと思われる。一方、「ふいに」は(36)のような場合には用いられるが、(37)のような場合には用いられない。それは、(36)の「雨が降り出した」ことは「晴れている」ことからは考えにくい予想外の出来事であるが、(37)の「稲光が走った」ことは、空が曇ってきたことから考えられる出来事であるからである。

このようにみると、「とつぜん」は、「前触れ」や「予想」の有無と関係なく、一瞬のうちに事態が起こることを表すが、「ふいに」は、まったく予想外の方向に展開していく事態が一瞬のうちに起こることを表すと言える。このことは、森田（1989）にも、飛田・浅田（1994）にも、その中の一部しか言及されていない。また、その一瞬に起こる事態が予想とどう関わるかは、両語の意味的な違いであるということも言える。

B．文の内容に、プラスもしくはマイナスのイメージがあるかどうかについて。森田(1989)は、「ふいに」はプラスのイメージではなく、マイナスのイメージを表すとしており、確かに実例には、(38)のような、マイナスのイメージを表す例が多い。しかし、(39)のように、「ふいに」はプラスでもマイナスでもないイメージを表すこともできる。

(38) 救難隊の指揮官以下数人は、それぞれ遭難機の翼やフロートの上に乗り移って、飛行機のくつがえるのを防ぎながら、だましだまし曳航をつづけていたが、そのうち不意に一陣の突風が来て、機はあっという間にひっくりかえり、二名の搭乗員と数名の救難隊員とがそのまま行方不明になってしまった。（五十六）

(39) 坂を昇り、坂を下り、また坂を昇っていくと、不意に木立の梢から鶯の高く澄んだ声が聞こえてくる。一羽だけでなく、その声に応えるかのように、遠くからもまた美しい啼き声が聞こえてくる。（一瞬）

(38)は、「機はあっという間にひっくりかえり、二名の搭乗員と数名の救難隊員とがそのまま行方不明になってしまった」の部分から、マイナスのイメージを表していると言える。一方、(39)は、「一羽だけでなく、その声に応えるかのように、遠くからもまた美しい啼き声が聞こえてくる」の部分から、プラスでもマイナスでもない、中立的なイメージを表していると考えられる。このようにみると、森田（1989）の「マイナスの事柄に「思いがけない」「思いもよらない」「意外だ」の気持ちが加わり、さらにマイナスの結果が添うという限定された状態のとき「不意に」が用いられる」という「ふいに」についての記述には、修正が必要だと言える。

5．まとめ

以上、「とつぜん」「ふいに」を構文的、また意味的に考察して記述した。「とつぜん」には、「「前触れ」や「予想」の有無と関係なく、一瞬のうちに何かが起こる」という特徴があるが、「ふいに」には、「予想もしていなかった事態が一瞬のうちに起こる」という特徴がある。これらに共通するのは、「事態が一瞬のうちに起こる」、つまり「突発性」という意味である。この意味は、文末の述語が完了した動的事態を表し、しかも「運動性」と「限界性」を持つこと、両語と直後にくる述語との関係が密接であること、また、一人称で意志的な動作を表せない、という構文的な特徴に現れている。両語の意味的な違いは、その突発的な出来事が予想とどう関わるか、という点にある。

また、文の内容にプラスマイナスのイメージがあるかどうかをみると、「ふいに」には、マイナスのイメージ、またプラスでもマイナスでもないイメージを表せるものの、プラスのイメージを表すことはできない、という特徴があるが、「とつぜん」にはそのような特徴はない。

このような「突発性」を表す語には、「とつぜん」「ふいに」の他に、「いきなり」「きゅうに」「とつじょ」などがある。これらは、類義関係にあるが、必ずしも同じ意味合いで使用される語ではないと思われる。「突発性」を表す語同士の関係性については、今後の課題として考察していくことにする。

参考文献

金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』岩波書店
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
國廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子（1982）『ことばの意味３　辞書に書いてないこと』平凡社
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
〃　（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

使用テキスト（本文中で注記のないものはネイティブによる作例である。）

あすなろ＝井上靖『あすなろ物語』、五十六＝阿川弘之『山本五十六』、一瞬＝沢木耕太郎『一瞬の夏』、恋人＝筒井康隆『エディプスの恋人』、忍ぶ川＝三浦哲郎『忍ぶ川』、沈黙＝遠藤周作『沈黙』、楡家＝北杜夫『楡家の人々』、花埋み＝渡辺淳一『花埋み』、冬の旅＝立原正秋『冬の旅』…以上CD-ROM版新潮文庫の100冊、石＝三浦綾子『石の森』集英社（1979）、影＝夏樹静子『影の鎖』集英社（1977）、

ホリー＝江国香織『ホリー・ガーデン』新潮社（1994）

付記

本稿は、2006年に台湾・台湾大学の「2006年台大日本語文創新國際學術研討會」で発表した論文に、加筆・修正を施したものである。

（こう　ぶんくん　台湾・淡江大学助理教授）